

第 6 業 務 状 況

1 市場取扱物品の概況

(1) 水 産 物

戦後の昭和21年から昭和40年代の前半にかけて、東京都中央卸売市場の取扱数量は、国内漁業生産量や都内人口の増加にともない、増加の一途をたどってきた。昭和44年以降は多少の増減が見られたものの、昭和50年代初めに多くの国で200海里の排他的経済水域が設定され漁獲規制が厳しくなったこと等から減少傾向へと推移したが、昭和50年代終盤以降は消費者の健康志向の高まりや円高による輸入水産物の増加等の理由から再び増加に転じた。昭和62年にピークを迎えた取扱数量は、国内漁業生産量の減少や消費者嗜好の変化等から減少に転じ、バブル経済崩壊後の景気後退による消費の落ち込み等もあって、減少傾向が続いているが、令和6年は前年比で1.3%の増加とやや持ち直した。

魚種別取扱数量を見ると、鮮魚の取扱数量については、昭和31年以降概ね減少又は横ばいで推移し、令和6年は約11万9,000トンとなった。活魚の取扱数量については、1万2,000トンから1万5,000トン台で推移し、令和2年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受け1万トンを下回ったが、令和3年は1万トン台に戻し、令和6年は1万2,000トン台に回復した。冷凍魚や加工品は、平成に入る頃から減少が続いているが、冷凍魚は2年連続で前年を上回り、令和6年は7万トンを上回った。一方、加工品は前年に引き続き9万トンを割り込んだ。

取扱金額については、昭和40年以降は物価高騰の影響を受け、その伸びは著しいものであった。昭和48年の石油ショック、昭和51～52年以降は国際的な漁獲規制の影響もあり価格は上がり続け、好景気も手伝って平成2年には過去最高額となった。平成3年以降は、バブル経済崩壊後の長引く不況やリーマンショックの影響及び消費者の魚離れなどにより、取扱金額の減少傾向が続いているが、令和3年以降は単価高等により4年連続で前年を上回り、令和6年は、前年に比べ3.5%の増加となった。

(2) 青 果 物

野菜は昭和28年、果実は昭和24年に戦前の最高取扱数量を突破し、その後も順調に増加していくが、産地における高齢化や後継者不足、生産費の高騰、調理・加工食品のニーズの高まり等の影響から、野菜は昭和62年の197万トン、果実は昭和48年の120万トンをピークに減少に転じた。

野菜の年間取扱数量は、ここ15年程は130万トンから150万トン程度、取扱金額は3,500億円から4,000億円の間で推移している。

だいこんやキャベツ、トマトなどの主な野菜は、栽培技術の進歩による生産地の広域化、輸送・貯蔵技術の発展、道路網の整備促進等を背景に産地リレーが形成され、周年安定供給が可能となっている。

輸入野菜については、加工・業務用需要の増加や消費者の低価格志向の強まり等を受けて生鮮野菜を中心に入荷増傾向であったが、平成25年以降は、国内産野菜の需要の増加により減少傾向となっている。

果実の年間取扱数量は、平成5年は約78万トンだったが、令和6年には約34万トンと30年余りで半減したが、取扱金額は11.1%減の約2,018億円となっている。

品目構成をみると、最も多い「みかん類」「かんきつ類」が全体の34%を占め、「りんご類」が14%、「すいか類」が11%となっている。

果実においても周年化傾向は強まっており、「みかん類」「メロン類」「すいか類」「ぶどう類」等多くの品目で、一年を通じて入荷がある。

最近の入荷状況をみると、栽培技術の進歩やおいしさ、食べやすさ、健康志向など多様な消費者ニーズへの対応等から、例えば、ぶどう類では皮ごと食べられる「シャインマスカット」、かんきつ類では皮のむきやすさや食味等が改良された「不知火」「せとか」等の入荷が増加傾向にある。

輸入果実については、バナナが輸入量の約5割を占め、バナナ、グレープフルーツ、アボカド等では、総取扱数量に対する国外産の割合は、ほぼ100%となっている。

野菜・果実ともに、卸売価格は天候の影響を受けやすく、消費動向にも左右されやすいという特徴があり、特に令和6年は猛暑等の影響を受け、野菜果実ともに取扱数量が減少した。

(3) 食 肉

食肉の需要は、昭和30年代から経済の高度成長に伴って顕著な伸びが見られ、豚、乳雄牛といった大衆性食肉を中心に生産が拡大し、昭和のバブル期を契機にその後減少傾向にある。

肉用牛は、昭和35年に全国の飼養農家戸数が約200万戸を数えたが、後継者不足、家畜排せつ物による悪臭や水質汚染といった畜産経営に伴って発生する環境問題、飼養農家の大型化等によって年々減少し、令和7年2月には3万4,000戸となった。また、昭和35年における肉用牛の全国の飼養頭数は、約230万頭、乳用牛は約80万頭と圧倒的に肉用牛が多く飼養されていた。これは、肉用牛が主として農耕用の役牛として飼養されていたためであるが、農業の機械化が進むにつれて昭和40年代当初には約160万頭となり急速に減少した。その後、食肉の需要増に伴い増加傾向で推移し、平成21年には約290万頭となった。平成22年以降は、宮崎県で発生した口蹄疫の影響や後継者問題による肥育農家の廃業等から一時250万頭を下回ったものの、近年は再び増加傾向となり、令和7年2月には259万5,000頭となった。一方、乳用牛の全国の飼養頭数は、酪農振興、牛肉価格の高騰から順調に増加を示し、昭和46年には約190万頭と肉用牛を上回るまでに拡大したが、昭和60年代をピークに減少傾向で推移し、令和7年2月の飼養頭数は129万3,000頭となった。

東京都が食肉市場を開設した昭和41年以降、東京市場の牛の取扱頭数は、昭和42年の約4万頭であったものが年々増加し、令和6年には約14万頭となっている。また、全国と畜頭数に占める東京市場のシェアは、昭和42年に4.6%、昭和55年に9.3%、平成26年には13.2%と緩やかに増加を続け、その後は横ばいで推移し、令和6年は12.7%となっている。

豚については、昭和37年における全国の飼養農家は約100万戸、飼養頭数も400万頭程度であったが、その後、飼養頭数は大幅に増加し、昭和56年には初めて1,000万頭の大台を超える、平成元年には約1,190万頭と過去最高となった。しかし、環境問題による規模拡大の制約、後継者問題、豚肉価格の低迷等により、平成2年以降の飼養頭数は、減少傾向で推移した。更に近年では、平成25年から26年にかけての全国的な豚流行性下痢（PED）の発生、平成30年から継続する豚熱の各地での発生の影響等により減少が進み、令和6年2月の飼養頭数は、879万8,000頭となっている。飼養戸数は、令和6年2月に3,130戸であり、1戸当たりの飼養規模は、昭和40年当時5.7頭だったものが、2,810.9頭と飛躍的に拡大しており、大手養豚業者による規模拡大が進んでいる。

豚の東京市場の取扱頭数は、産地食肉センター等の整備が進み、産地における畜解体処理の拡大及び部分肉流通が進展していることもあり、昭和46年の約59万頭をピークに減少傾向であった。平成22年から24年は約18万頭まで減少したが、平成25年以降、国産豚肉の需要の高まりや集荷対策等により20万頭前後で推移し、令和6年は約22万3,000頭であった。

また、令和6年の全国と畜頭数に占める東京市場のシェアは1.4%となっている。

(4) 花 き

昭和63年から東京都中央卸売市場で取引が開始された花きの取扱数量は、昭和63年から平成13年にかけて、北足立市場、大田市場、板橋市場、葛西市場、世田谷市場に花き部が順次設置されたことで年々増加し、平成14年には切花換算で約20億5,900万本に到達した。しかし、その年をピ

ークに減少を続けており、令和6年の取扱数量は切花換算で約12億7,700万本となっている。取扱金額は、平成19年の約997億6,400万円をピークに大きく減少し、令和6年は約886億3,400万円となった。

花きの輸入は、切花類が大半を占め、関税が廃止された昭和60年以降輸入割合は増加傾向となっており、品目としては、日持ち等品質向上により「カーネーション」や「キク」の増加が顕著である。輸入の主な相手国は、コロンビア、マレーシア、中国となっている。

切花の取扱数量は、平成14年から平成20年の間では10億本台、平成21年から平成26年の間では9億本台、平成27年から令和元年の間では8億本台、令和2年以降は7億本台と、減少傾向となっている。取扱金額は、平成19年の約648億3,900万円を境に減少し、平成23年には約550億7,900万円まで落ち込んだものの、平成24年は増加に転じた。その後は横ばいで推移していたものの、令和2年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により前年を大きく下回った。令和6年の取扱金額は前年に比べ減少し、約618億600万円となった。主な取扱品目の金額をみると、「輪菊」が約69億9,500万円と最も多く、次いで、「スプレー菊」「カーネーション」となっている。主要な切花である「菊類」「カーネーション類」「バラ類」で切花全体の取扱金額の45.1%を占めている。

鉢物の取扱数量は、平成14年の約6,100万鉢をピークに減少し続け、平成29年は3,000万鉢を割り込み、令和6年は約2,000万鉢となった。取扱金額も、平成14年の約249億5,200万円をピークに年々減少しており、令和6年には約138億1,500万円となった。主な取扱品目の金額をみると、「ファレノプシス（胡蝶蘭）」が約34億7,100万円と最も多く、鉢物全体の25.1%を占めており、次いで、「ハイドランジア（あじさい）」「シクラメン」となっている。

近年では花の需要を高めるために、花を贈ることを推奨する、2月14日の「フラワーバレンタイン」や11月22日の「いい夫婦の日」等の取り組みが進められている。

2 令和6年東京都中央卸売市場における取扱状況

(1) 水産物

令和6年中の水産物の総取扱量は、約31万トン、金額で約4,772億円となっており、前年に比べ、数量では1.3%の増加、金額でも3.5%の増加となった。

鮮魚は「わらさ」「まいわし」「またい（養殖）」「いなだ」等が減少したものの、「かつお」「まあじ」「ぶり」「さんま」「まぐろ（国内）」「はまち（養殖）」等が増加した結果、前年比0.9%増の約11万9,000トンとなった。

冷凍魚は「冷たこ」等が減少したものの、「冷ぎんさけ」「冷ほんまぐろ」「冷ぎんたら」等が増加したため、前年比5.3%増の約7万600トンであった。

その他、活魚は前年比0.5%増の約1万2,300トン、貝類は前年比1.8%増の約2万700トン、淡水魚は前年比6.3%増の約1,070トン、海そう類は前年比5.1%減の約5,030トン、加工品は前年比0.9%減の約8万4,600トンとなった。

※「第8 参考資料」の「1 令和6年中央卸売市場取扱実績（水産物）」を参照。

(2) 青果物

令和6年中の総取扱量は、約168万100トン、金額で約6,100億円となっており、前年に比べ、数量では4.8%の減少、金額で4.9%の増加となった。

野菜は、約130万500トンで前年比4.0%の減少、主要品目である「だいこん」「にんじん」「きやべつ」等ほぼすべての品目で取扱量が減少した。年間平均価格は302円で、前年を31円(11.4%)上回った。

果実は、約34万4,000トンで前年比8.7%の減少、「シャインマスカット」「とちあいか」等の栽培が拡大した一部の品目を除き、取扱量はほぼすべての品目で減少した。年間平均価格は587円

で、前年を60円（11.4%）上回った。

※「第8 参考資料」の「2 令和6年中央卸売市場取扱実績（青果物）」を参照。

(3) 食 肉

令和6年中は、取扱数量が約8万6,000トン、取扱金額で約1,473億円となっており、前年に比べ、数量では3.4%の増加、金額では6.1%の増加となった。

このうち、牛肉は、数量が約6万7,000トンで前年比2.4%の増加、金額が約1,355億円で前年比5.5%の増加となった。

豚肉は、数量が約1万9,000トンで前年比6.9%の増加、金額が約117億円で前年比12.6%の増加となった。

※「第8 参考資料」の「3 令和6年中央卸売市場取扱実績（食肉）」を参照。

(4) 花 き

令和6年中の取扱数量は、切花換算で約12億7,700万本、取扱金額は約886億3,400万円となっており、前年に比べ数量では4.1%の減少、金額では2.2%の減少となった。

切花は、「小菊」「スプレーカーネーション」等の取扱いが減少し、取扱数量は前年比3.0%減の約7億3,700万本となった。取扱金額は約618億600万円と前年比1.0%減少しており、年間平均価格は84円で、前年を2円（2.1%）上回った。

鉢物類の取扱数量は、「ハイドランジア（あじさい）」「シクラメン」等が減少したため、前年比6.0%減の約2,000万鉢（切花換算で約1億5,700万本）となった。取扱金額は約138億1,500万円と前年比4.7%減少しており、年間平均価格は706円で、前年を10円（1.4%）上回った。

※「第8 参考資料」の「4 令和6年中央卸売市場取扱実績（花き）」を参照。

3 令和6年東京都地方卸売市場における取扱状況

東京都知事から認定を受けている地方卸売市場数は、23区内で青果1市場、多摩地区に青果3市場・水産2市場、花きは3市場あり、全体で9の市場がある(令和7年7月1日現在)。

東京都の市場流通全体に占める地方卸売市場の取扱高の割合は、取扱数量で水産物0.2%、青果物15.5%であり、また、取扱金額では、水産物0.3%、青果物14.0%、花き4.0%である。

なお、令和6年中央卸売市場及び地方卸売市場の取扱実績については、下表のとおりである。

(1) 水産物

令和6年中の水産物の総取扱高は、数量が約674トン、金額が約13億円で、前年比では数量で2.2%の減少、金額では3.7%の増加となった。

(2) 青果物

令和6年中の青果物の総取扱高は、数量が約31万トン、金額が約987億円となっており、前年比では数量で3.8%の減少、金額では6.9%の増加となった。

(3) 花き

令和6年中の花きの総取扱金額は、約37億円で、前年に比べ、5.1%の減少となった。

※「第8 参考資料」の「5 令和6年地方卸売市場取扱実績」を参照。

令和6年中央卸売市場及び地方卸売市場取扱実績

(単位：トン、百万円、%)

		総 数		中 央 卸 売 市 場		地 方 卸 売 市 場	
		数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
水産物	総 数	313,970	478,448	313,296	477,185	674	1,263
	1日当たり	1,236	1,884	1,233	1,879	3	5
	構成比	100	100	99.8	99.7	0.2	0.3
青果物	総 数	1,987,606	706,510	1,680,063	607,810	307,543	98,701
	1日当たり	7,918	2,815	6,693	2,422	1,225	393
	構成比	100	100	84.5	86.0	15.5	14.0
食肉	総 数	85,630	147,316	85,630	147,316	0	0
	1日当たり	344	592	344	592	0	0
	構成比	100	100	100	100	0	0
花き	総 数	—	92,321	—	88,634	—	3,687
	1日当たり	—	305	—	305	—	—
	構成比	—	100	—	96.0	—	4.0

(注) 1 花きの数量は、種別毎の取扱単位が異なるため掲載しない。

2 数値は単位未満を四捨五入してあるので、合計数値と内訳数字の合計とは一致しない場合がある。

3 地方卸売市場の花きの1日当たり金額は、開場日数が市場によって異なるため掲載しない。